

2月11日（水）に「ぐんま教育のつどい 2015」が群馬県青少年会館において開催されました。生徒・保護者を含め総勢 85 名の参加者がありました。

今年からテーマを「学びがつくる市民社会を目指して ～考え、伝える力を育てる～」に変え、「市民」を育てる教育について、参加者全員で意見を深めることができました。

開会集会

「ぐんま教育のつどい 2015」は、市立前橋高校の吹奏楽アンサンブルで幕を開けました。部員数が少ないとのことでしたが、アンサンブルとしては十分に厚みがあり、参加者一同、引き込まれるような演奏でした。ポピュラーな「フニクリ・フニクラ」や「森の鍛冶屋」といった曲目もあり、私も心を躍らせながら演奏に聴き入りました。特に「森の鍛冶屋」では、楽器を様々な効果音として用いて、森の情景が目に見えようでした。また、神保実行委員長のインタビューに対し、丁寧に楽器の説明をする生徒の様子に、高校生が「つどい」に参加する良さを改めて実感しました。



開会集会はそのまま、実行委員長のあいさつへ移りました。あいさつでは、「みんなで本音を出し合いながら、授業について語り合しましょう。積極的な討論で実りのあるつどいにしましょう」という呼びかけがありました。

実行委員長のあいさつの後、教文部長で

ある私から基調提案を述べさせて頂きました。基調提案では、生徒にじっくりと自分自身の考えや価値観を見いださせることの必要性を強く訴えました。そして、大人が子どもたちと共に考え、共につくる社会を目指して「つどい」で意見を交流することを提案させて頂きました。

全体会企画

みんなで授業について考えよう

今年の全体会は、教育の原点に立ち返って「授業」についての実践報告を基に、議論を深めました。最初に、司会の澁谷さん（高商）から次のような提案がありました。「学校が生徒の自己実現を支援する場ではなく、時に教師の『押しつけ』が中心の場となり、『市民』を育てることが意識されていない。どうすれば『市民』を育てることができるか、授業実践報告を基に一緒に考えていきましょう。」

この提案を受け、3名の先生の実践報告が始まりました。

①大貫正雄さん（桐西）

大貫さんの実践報告は、授業の様子を録画したビデオの紹介から始まりました。授業の中で「ドーナツ型磁石の積み重ね」「実は重いぞ！新聞紙」「エアフレッシュ」の3つの実験を取り上げていました。どの実験も教師の問いかけと、それに対する生徒の反応に見応えがありました。

授業紹介後、大貫さんから「40人学級で

授業を行うことは難しい。教育実践を充実させるためには、まず教育条件の整備が必要である。」という問題提起がありました。

②田中立仁さん（高工）

田中さんからは、授業の中でできる工夫を中心に実践報告がありました。議題について「賛成」「反対」等の4つの選択肢を用意し、生徒におもちゃのマイクを持たせて意見を出させる『4つの選択』は、会場にいた参加者に「自分もやってみたい」と思わせる魅力的なものでした。また、生徒の意見をプリントにまとめて配布するなど、地道な取り組みの重要性も報告されていました。

報告中にあった「正論をぶつけ合う中で、『笑い』はコミュニケーションを図る手段である」という言葉は、互いに意見を表明し合える「市民」を育てるために大変重要なことあると感じました。

③坂本政道さん（高経附）

坂本さんからは、「自ら学び自ら成長する」探求型活動について、実践報告がありました。「和歌山城に三波石がある理由」や「天体のクレーターの数の違い」など、自分で考え、自分で調べる必要のある難易度の高い課題を、生徒が意見を出し合いながら解決していく様子が語られました。報告を受けて、多様な考え方があることを知り、互いを認め合う協同学習の魅力が伝わってきました。

生徒から「意見を言えるようになった」という感想だけでなく、「人の意見を聞けるようになった」という感想があったことがとても印象的でした。

第2分科会「高校生の学校生活」

午後は、「授業づくり」「高校生の学校生活」「地域と教育」「原発と教育」の4つの分科会が開かれました。私が参加した

第2分科会「高校生の学校生活」について報告します。

第2分科会の参加人数は7名でした。若手の教職員から一般の方まで幅広い参加があり、様々な視点から議論を深めることができました。

高商の澁谷さんからは「性同一性障害の生徒への対応」について報告がありました。また、私は「特別支援教育についての分析と考察」について報告しました。

どちらも障害を持つマイノリティの生徒に対し、学校においてどのような支援ができるかに重点を置いていました。議論を深めるうちに共通する問題点も浮き彫りになりました。

中でも、マイノリティの生徒に対して支援を行う際に、学校によっては教職員間の連携がうまく図れないことが、大きな問題点としてあげられました。「一切の『特別扱い』をしないことが集団の向上に繋がる」という考え方の先生と、「個々の生徒に合わせて対応しよう」とする先生の間で意見が対立することがあります。「生徒に言うことを聞かせる」のが良い指導なのか、「生徒の自己実現を図ること」が良い指導なのか、教育についての考え方・捉え方によってその後の対応に大きな差が生じます。生徒にとって最も良い支援体制が築かれるように、教職員間でじっくりと話しを重ねていくことが重要であると、参加者全員で認識を深めました。

また、一般参加の方からは、勤務先で障害を持つ人が同僚から十分な理解を得られずに仕事を辞めてしまったことについてお話しがありました。社会が障害を持つ人を受け入れられるように、政策や制度の充実に向けて動いていく必要があります。それと同時に、マイノリティの人を理解し受け入れる意識を育むために、学校でどのようなことができるかを考えることも、今後の課題としてあげられました。